

一勝声生

大阪市南区鰻谷中之子

朱ぬし

三度摺

加島屋清助



増補
佐和利集
四編

佐和利集

淨瑠璃 根本鎧

一名
又以利集

浪喜清喜毫坂



吉川



目録

浜市内の假

植生村の假

対原切の假

三吉ふ別の假

竹の石がえん

全奥のどん

岡寄のどん

タ部松のどん

書墨のどん

道行のどん

一 壱阪靈鑑記
二 累物
三 患物
四 先代女房
五 萩房
六 伊賀
七 全
八 太功
九 忠臣
十 千草
十一 櫻繩
十二 楠忠臣
十三 桂太
十四 藤
十五 朝

利
回りの久ぬをよひ參
みせられどゆのを一見
のみゆくれどゆのゆゑに
のゆゑにゆゑのゆゑに
赤來とまくはゆゑに
赤來とまくはゆゑに

壺隆寺の詠

サカリ

十三矢 浦
十四阿浦 ト浦
十五金比羅利鬼
十六伊勢音頭
十七廿九六古夫
十八廿九六古夫
十九廿九六古夫
二十廿九六古夫
廿一忠良義士傳
廿二伊賀裁
廿三山勧
廿四雨
廿五時
廿六廿九六古夫
廿七廿九六古夫
廿八廿九六古夫
廿九廿九六古夫
三十矢 浦
卅一阿浦 ト浦
卅二金比羅利鬼
卅三伊勢音頭
卅四雨
卅五時
卅六廿九六古夫
卅七廿九六古夫
卅八廿九六古夫
卅九廿九六古夫
四十廿九六古夫
卅一忠良義士傳
卅二伊賀裁
卅三山勧
卅四雨
卅五時
卅六廿九六古夫
卅七廿九六古夫
卅八廿九六古夫
卅九廿九六古夫
四十廿九六古夫

櫻澤町の詠
海し場の詠
平治往還詠
志海ちの詠
浦原の詠
岩井風呂の詠
勘助佐遠詠
八百町の詠
赤須出立の詠
主兵衛切獲詠
遠び毛の詠

むろく

さき

つんま

けりもやかのめ同と

かと

つが

さり

くらんのん

後えとひ事極む教を也

ほり

と

う

か

い

アラア

ミ

アラア

ミ

内の事身の連とばと見

ぬ

け

い

で

シ

レ

シ

レ

シ

レ

シ

レ

シ

レ

シ

ね

け

い

で

シ

レ

シ

レ

シ

レ

シ

レ

シ

レ

シ

ね

け

い

で

シ

レ

シ

レ

シ

レ

シ

レ

シ

レ

シ

すのひとへひを殺ひと
撃るわば身と身と身と
相んで死ぬれひを殺す
かふ男が死ゆ身の身
の云ひれ後が立つものと

くもれまうやかのほの
ひわ まこと まこと まこと
火と感ゆ

但まおの後

サリキ

かくへゆ神後てゆき耶
ぬよど歌りしがくらむ

かくりやがくじり歌取ゆ
後見すゆまの心モ春
せと翁タム可也づてト
されしよはれ是て情ゆ
かきあ風とあやうふゆ

（つま）（うゆ）

はせと下へすぬし師也。

（さう）（くらう）（ざう）

（いき）（りき）（りき）

（つむ）（つむ）

（そぞ）（そぞ）

（つむ）（つむ）

（つむ）（つむ）

（つむ）（つむ）

（つむ）（つむ）

狂歌かだまの跡をも狂

（か）（か）

（じ）（じ）

（そぞ）（そぞ）

（つむ）（つむ）

（つむ）（つむ）

（つむ）（つむ）

（つむ）（つむ）

とふはらの羽衣をたま

（か）（か）

（じ）（じ）

（そぞ）（そぞ）

（つむ）（つむ）

（つむ）（つむ）

（つむ）（つむ）

（つむ）（つむ）

あとも久の久とほりあひで

（か）（か）

（じ）（じ）

（そぞ）（そぞ）

（つむ）（つむ）

（つむ）（つむ）

（つむ）（つむ）

（つむ）（つむ）

おうりのゆうやま流とゆ

（か）（か）

（じ）（じ）

（そぞ）（そぞ）

（つむ）（つむ）

（つむ）（つむ）

（つむ）（つむ）

（つむ）（つむ）

めぐみゆめの面同あお

（か）（か）

（じ）（じ）

（そぞ）（そぞ）

（つむ）（つむ）

（つむ）（つむ）

（つむ）（つむ）

（つむ）（つむ）

あく度まよおれが今さま

（か）（か）

（じ）（じ）

（そぞ）（そぞ）

（つむ）（つむ）

（つむ）（つむ）

（つむ）（つむ）

（つむ）（つむ）

せめてまく圓の鏡

（か）（か）

（じ）（じ）

（そぞ）（そぞ）

（つむ）（つむ）

（つむ）（つむ）

（つむ）（つむ）

（つむ）（つむ）

連
海
を
ひ
ま
か
づ
く
る
と
あ
さ
し
切
り
の
う
ん
ま
可
も
と
あ
そ
ば
の
れ
圓
の
わ
よ
ま
と
は
な
く
こ
ア
ト
で
り
う
ほ
く
と

連
海
を
ひ
ま
か
づ
く
る
と
あ
さ
し
切
り
の
う
ん
ま
可
も
と
あ
そ
ば
の
れ
圓
の
わ
よ
ま
と
は
な
く
こ
ア
ト
で
り
う
ほ
く
と

忠
義
滿
刻
印
切
刀
證
名
章

サニニ縁縁と夕雲のむすと
みせん いのぶさう

テリハラヒラウ

今かうりげて仰歌小説也

一の金ア

とせのひのやせをあれは

ひがみひあくどの何とも

彼も僕ももひろがたと

ト

一の花あけ
風枝あらうみ透トす
写キのすが波タうやくまざり
モ内トシに人ハナウきけぬあふても

一の花あけ
風枝あらうみ透トす
写キのすが波タうやくまざり
モ内トシに人ハナウきけぬあふても

四
小人也接ひと煙とあ
あがめうの動ひ計ふ
送るをもまほせらむ
つるよべとが内わ初の
煙ももれせりと意語
みゆきもうかくもや
通のゆのり移てわ送る
付ぬ男とばんい
うゑひあひははひ
わやまよすとゆく
わ

恨ばらまひいとる
け病めどもれお病りと
えひふうれせわび貴れ
れもあしけとくわのけり

三吉子別の譲

きよみをとせんとく
あくへゆりうりじて同
とじゆくえまつて傳ゆ
付せんとしげかほりひ
ことまちむくわみ川

でげりはゆかぬ國をあ
めみかへねりいと化爲
ゆに二日もゆうそ
おもひてたも毒氣も
くらみ後より身

りつひの歌あらわしやまに
百の代えかゆの龜と鴟
ぞとま轡みえどかめと
投伏て歎き懐中ゆゑの底
一あ十三身ゆにせきも爲め

の

おとこゆきかがみほうを

二歳えそうはいげふゆ

でもうだまうひゆいと

あふとひぬわ持しきと

合ひよきことされ往還の

とうまう

あ化がれ以てやめとあども

わの代人か氣葉ふ若ざかに

多く御秋物のれ見てあまう

あとうとよとよとよとよ

あゆみの縁とてよあひる

かかのれまわらひくそへ
子を殺すのでのやひふぞ
きふのうれまくすゆゑ
こがれと秋なり

中古間後 摂文

先代

六
まご頃もあら騒ぎあら
ウの傷のあはれあはれど以思
ぐるのうねり興てもさる
翁の乳かめもうちきゆか付
ぬ乳の人あらと二人

ひとびを殺し殺す

全 奥

やあやくとれ継う乳の
かん
もと子心を忘れぬ
れにふの難浦の乳の八

神が手を抱くあはる

かのりそめ

作実哉

國清乃先

奥アリ

可もや盡うのまつせとこや
ゆめにもよまさんあれ

七

の

の

の

の

の

の

いひがけ

つう

名前を云ひ号の男おおのが
うろこでこなれとあつこそ
内うち色ゆき氣で駕籠
夜は一回ふ氣り船うみ雲
うねぬ駕籠をえの向風と

そと どあ うら
まく深み深坐すとそじても
ゆひゆき駕籠のんがよがぬ
ぬれれ敷されととおも受け
ほぬ御とほね後後には
泰はるにも戀と艶ごめ紹

乃なれあらゆる化生の源
子ふ別きご成れ小まき我の
ゐのうの内連関役人の我
娘園西くも切きりとす中仙
乃の東内里移きし連て

ひきよと酒み歌ひかゝりと
お子ねみ浦迷ふまひまの
娘福柳木浦で候と父翁の
おもゆみ花をまかひあま
私ひもあまくわすれぬ

乃あらまほる唐木も犯
金てあれぬ事すまの礼

太切記

夕顔棚ノ段

抜文
サガリ

老の酒が初め罷五ぞう
引もとく心の休ひ徳ゆ

お萩の葉相及も
やありくオニタモテ度十次第
ウシホツツクの御元と莫憶也
け縁や織方の通じと相せ
ゆふ物をゆゑて多

已と多々

標の弟もえよをぞれのれ

標嘆のりづく角がりこめの

魚のれ縁も大々こな見

標り力蘇の可えやや姿う

神津の道の波、坐に筑城

二重の歩と取ぬ向園の
縁嫁がよそへ連て三人
奥の石へゆる。

忠臣講釋

七音切

不キ

復づ立あひ候あてち東

九

可也かうのあひう
出で子へ此ても機りぞり
つるをとがでももり
ぎのあじこほのまをそ
至るを鶴の煙の煙を

やもあつてまごのま情ふも
あまかくすもとせわに
たれつきのめおどしき
私とあつてあはれぬれ
えいあればととほよの

月

この御秋か翁のそぞり月
めぐらす云ひてたをと拝ゆき
迄もうそぞれのふと絶う月
ウタ人 オハナモウタ
魚魚の夢の花化の
魂の物有うさゆくや秋ふ

の秋歌主をく感とさ(奥)うが
千本櫻道行

舞い散るれ散るよそとよ
ゆるふとと銀絲色
界のれりあらう波風

ゆくれ紅爐の浦の東
 よきまをもて置小浦を
 すくやうてぞありいとあ
 すきとめ翁の實ひよろしと
 ゆき見ゆ伝づ忠翁より
 たがひ

身の身は都方の身ひと身
 樓の浦ゆふ身身身身
 あわせ深ゆ向翁源氏
 みやうわじゆく身りづ身
 がくじうてづ身何身の身身

お身を氣かあはれと名なまう
バクアシバクアシの羅ラれいの小
國カバのちくとよと本ハタケの事
おえりひかくわきあら三ミ度
谷カタもにゆく深カマふてうど

ありりかアリリカ力カくねカクネお力カの酒カ
アヌアヌ相サム舞ヒキ五ゴまう
かくら海カクラの音カタマリお力を刀カ
御元ヒメイの跡カタマリの跡カタマリ原カタマリ
獨ハタチの見カタマリそぞろりと

力の爲に爲して身で身の爲と
一極ありてよりようく
も極りてよりようく
ゆゑに至れりとむと
徳をもつてある方席あらか
ぞりと社儀の法と云

けし前事こそ強也
ひきそひて入るまぐ
勧めなは伝承のれど
多喜の歎とびとを喜ぶ
今度は時事の事の方

ゆく夜の月は遠きに覺ゆ
數度とかあるも今より
て放つ矢を以てやうる
ぐじかにみれようもあま
通すあく見えぬるをま

かほきの處をあらひ
おも事のそばへりりる身
角ねうれ身もよわるるの
柳生の木をもむづく
れめうがどりくぢりるごと

あひからへあひあひをあびと
それとえりをぬるやのゆめう
の星つらぎもとこをりぬ登
ゆきまくらがれしとくの徳
よほの舞はせしがふり

筑前博湊町乃段 サハリ

をやめしむ間ひ博應の語
五歩を絶収てみたにかめの
ドア まみれての裏冷と絶路
博とあるて湊の町小

アタマのまへる御色也人の
お底の底と取れり。且ちも
毛皮三十石あるんやとさ
五万石の下のものとかもも。
通ひりて船行どり。酒

正月
年津十石の米穀アシカあ
もよごす事も大體の入
総合めて寛へども却て相
手のみぢり往きあり奉る
御物かとゆきりおゆき

ゆきとてを秋にあひよし
首尾ゑふきりき回向も
豊多事事の事な月と夜
かくそとれども金霞
遙れゆきの念り往々

ゆきとてを秋にあひよし
首尾ゑふきりき回向も
豊多事事の事な月と夜
かくそとれども金霞
遙れゆきの念り往々

可也かと云ふをどす。のどの

とおもひて、假想がて、心象す。

矢は御傳後

ナキ

ゆとりふとも、角つ小きし法
うるそ見本ればせで、詠色反



かくさん つら
魚獲とす。ばほは、假想多く
あらひにりつてあれど、ゆゑれ
て、あらひふと、詠色反
ゆゑにし歴れか、遠きよりと
まなみと、ゆふ、一人の娘が

先立一念未起もあめひと

かんもぬりふりともやまと

整めて是懐極をもよもよ

眼鏡もとめどゆめんと斷

身身ゆきゆげてのぞま

さとくえんえ、うとう休む
魚はまき魚の浦いゆと

ひよゑあわう

王佐家譜

シトキ

二縄りよと下縄りゆめかわ

字面に守綱のあらわす
やうよもがまじゆくはるか縦筋
の字角が筋とて下ふひんさ
我れ酒のむのに較ひ筋の
筋りとせひゆきやまほしの筋
多しあひりとて見にきて後を
のひきを車ひひとの後
わざとふ後事と後小も
眞達をとて下へゆる

志波奈良後

クドキ

月

日暮里二二一
金ヶ原

あつても宿の跡の跡を
持つてゆる坂東の報杜いそ
翁がひまほと云ふやうめぐら
こひきえまと宿の内も

宿本

一
かき車乳母も名遊と見
焼けりゆうと物ふも佐士
義意ひじ乃須也(さか
月
小屋くもに櫻の處のづきが
五にと歌ひ事同いゆのぞ

十五

ウタツギ
次第再びの運あづ二三の章
もうす別れ又翁れかむれ別
ウ
モレ秋れみ秋月とあ
がくうとさうとくそんとく
うとけみ秋月り

油屋乃先
ナハリ

伴勝音頭

タリ
ソラミガズムゆとテ一吹流の
めこ多モ別色アリとあはの種
キルキシトテソラミガズムと
近て有内モ序せの同紙が

(1)

えのきあひどきかくさう
よみか別をとえまどせうと

ひ林ヒノキ一
角カクかあそぶ男ヒト恨ナガシめ

氣カス氣カス

時雨傘ヒマツブ

ナハリ

卷三

月ヅキうちテ入アガセ活ハタクとすみれ

と桺ヤシケか向アガマにあまぐゆ

やは緑ロウむかの黒クみ海シマ紫シモツの

そよに吹アフ及シテれ若ヒトうり

やうく悲カミかゆ猶シテ渾濁ムダツ

ひきれはと立候ふとぞれ
かとくとくへ
連々舞びり

十四春
勘助経家後 ハトキ

のと身ハシケがあわもんとされ
えがねヒカル
既マヒルのりうれしの續ヒル

むやうれかとゆす往來
あてぬみやとらくも
さうの風ハラようそわらき
うと立ハタフ舞ハタフゆより
扇ハサウエよそわやこうさん

めう
秀あとうん二へともゆく
いんせらうつる
因まやじる憎のあか
けれた我子み乳り捲え
月のとあるく蘇てたれ
のと心も空へたてて又酒

あまう向あひかみに
えんちごいのせ
争ひ紛れと春を争ひて
ア
あひを取どくわびめの件は
れなと努力してがまく
夫先マリヤやまくと我子と

乱世抱きあわば汝れこれ

はれめみ

かを代羊喜書
八百屋秀俊

サハリ

ひよとけ夜はせで、酒をぬ
縁りと酒の肴

とれどやれゆきすうあう
ふかくとひくふく樂さん
わ様喰あつまうら唐中
わぬ何れともとあせさせ
ふてとこぢやあんて原

十九

トシノリ一ノ月

コトカヒトサの道と吉良と候
トボの事考つるを無事に候人

赤須出立後

冬キ

人 つぎ

10月

ハ達ひひき、克よしに貪
め達ちやう一く
物をも食むむれふ。

鶴林園

悦んで居て伊斐モヤム
行ぬひに萬物の事
てかの事の色このも事
すのみ事の様云々と之
に從事れぐもとく事方

土

(十) かんぬ

つうそでたま

題

かんぬの傳ふゆと紳杖
今ア
あやめうみわ

伊賀越

喜多切腹後

タキ

セ
傳とばして源ノハバの事
劉がき小説の事

卷五

くとむりぬひ(ひ)方往
いんぐは
周囲かおがせにありそれ
とえそれの約もあざる
め命せねまとも殺
金實加忍やのじあみ

ひく

ほく

かんぐく

詠歌花月のまゆゑに櫻舞の

せめ

へう

せ

妻を従事も休も空すけ

うづ

うづ

うづ

うづ

うづ

うづ

うづ

うづ

舞丸へりのやとてくどた

うづ

うづ

うづ

うづ

うづ

うづ

うづ

うづ

秋けが春ほるる煙酒にそ
際(さき)縁(いはな)は睡(ねむ)ぬ身(み)を之(その)浦(うら)

あ木六

人(ひと)情(じやう)一(いつ)か(か)は(は)う(う)海(うみ)れ
川(かわ)の(の)歌(うた)み(み)ほ(ほ)と(と)重(う)も(も)并(なが)る

え

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

遠(とお)山(さん)屋(や)乃(の)後(ご)

さり

刀(と)

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

と(と)妻(め)の(の)重(う)み(み)と(と)悦(え)の(の)歎(か)

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

ス

更ふ夜をもつて勤じよまゆる
くの御宿あはへしむる
元も津しほひよまの介
かびてひも とく 一へ
かく常徳と氣の事者津くふ
かく
かの本津ひ東方を南徳つて

2 つもつかまへ一にまくらす 一〇八

萬動地と済羅羅とまの

こあ

つみき

あやめの緋代の事ひまむ
徳くわづと法うれひそそ

ウ

ナ

ツ

ラ

ヘ

くと喜びしとゆの内處
ウ

リ

カ

ラ

シ

ゑの内處と和と正月

カ

カ

カ

カ

カ

明治三十六年八月二十日印刷
公
年八月廿七日發行

大阪市東北久太郎町三丁目
辛亥屋敷

編輯兼
節貯者

鶴澤勝右衛門



發行兼

印刷者

大阪市南区鰻谷中之丁

加島屋清助



